西道仙翁揮毫門柱の発見と移設

本会会長　原田　博二

西道仙揮毫の門柱が森秀次氏のご好意で、市内大山町から道仙ゆかりの琴石の地(鳴滝1丁目)に移設された。そこで、11月22日に本会主催の説明会が同地で地元の自治会関係者や本会会員の参加のもと開催された。(写真:村崎撮影)

この門柱については、長崎新聞社編集局生活文化部の高比良由紀次長によって「ひ孫ら”安住の地”へ移設」「最初の建立場所は『祝捷山』」と、2回にわたって記事にしていただき、大きな反響があった。改めてその経緯等ご紹介させていただく。

昨年5月12日、大山方面史跡めぐりの開催を1週間後に控え、本会幹事や有志でその下見を行った。バス停「大山口」から大山教会への道は結構急な坂道であった。随分と歩き、道も段々険しくなってきたころ、先頭を歩く人たちが「立派な石柱があるぞ」「何か字が書いてあるぞ」というので、行ってみると、確かに御影石の立派な石柱であった。落ち葉を払うと、「山呼萬歳聲」「日耀千旗影」の文字が刻まれていた。しかしそれにしても堂々たる書体で、さぞかし名ある人の書だと直感した。さらに落ち葉を払うと、「賜琴石斎西道仙題」の文字があらわれた。西道仙の揮毫した門柱だったのである。

西道仙(1836～1913)は、医師西元良の子として、現在の熊本県天草市五和町御領に生まれた。西家は、初代松逕以来、長崎奉行所の御用医師を勤めた家柄であるが、道仙の曾祖父で、4代松佺の長男道俊は、故あって家督を弟松径に譲り、以後、天草の御領に隠棲した。ちなみに、道俊、松径の弟が阿蘭陀通詞本木仁太夫良永であった。

道仙は、若い頃から曾祖父道俊の影響を受け、勤王の志が篤かった。祖父松仙、父元良を相次いで亡くした道仙は、漢方医として修行、文久3年(1863)28歳の時に長崎に移住、医院を開業した。

明治元年(1868)沢宣嘉が九州鎮撫使総督、長崎裁判所の総督として長崎に赴任した。長崎裁判所は、同年には長崎府、翌年には長崎県となり、沢は初代の長崎県知事となった。沢は、旧知の道仙を高く評価、いろいろなことを諮問したので、道仙は沢の知恵袋的存在であった。ある時、沢が褒美をやろうと言うので、道仙は迷わず琴石を所望した。この琴石(長3,30m、幅1,36m)は、鳴滝の山中にある自然石であるが、琴の形をしているので、琴石と呼ばれた。以後、道仙は賜琴石斎と号した。

ところで、前述の門柱は、上小島5丁目の祝捷山公園(通称合戦場)に建てられていたもので、『長崎市史地誌編名勝旧跡部』に「(略)西道仙書祝捷山の大文字を刻せる巨大なる自然石あり、西北なる小島、田上両方面よりの入口には各石柱を対立せしめ小島口に日耀千旗影、山呼萬歳聲と刻し、田上口には武威揚海外、義氣貫天中と刻す、西道仙の題する所である。(略)」とあるので、この「日耀千旗影」「山呼萬歳聲」の門柱は、「武威揚海外」「義氣貫天中」の門柱とともに祝捷山に建てられていたのである。ちなみに、現在、「武威揚海外」は祝捷山公園の一角に残されているが、「義氣貫天中」は所在不明である。

ところで、これらの門柱が建てられていた場所であるが、現在の祝捷山公園には西側に駐車場などのある入口1か所、北側には田上寺から登る入口と徳三寺から登る入口の2か所がある。市史に「(略)西北なる小島、田上両方面よりの入口には(略)」とあるので、当時は小島口と田上口の2か所であった。「西北なる小島、田上両方面」とあるが、小島口と田上口が西北の同じ場所であるはずはないので、ここは西が小島口、北が田上口と解釈すべきであろう。

以上のことから「日耀千旗影」「山呼萬歳聲」の門柱は西側の小島口に建てられていたことがわかったが、「武威揚海外」「義氣貫天中」の門柱が建てられた田上口は、具体的に田上寺側なのか徳三寺側なのかわからなかった。

ところが、最近、江上葉子氏が徳三寺の駐車場の片隅に放置されていた「祝捷山登口」の石碑(長114,0cm、横24,0×21,0cm)を発見した。この文字も道仙の揮毫と思われるが、その右側面に「此坂路百間改築明治四十四年十月竣工　田中直三郎」と刻まれていることから、この徳三寺側から登る入口が田上口なのである。

このようなことで、「日耀千旗影」「山呼萬歳聲」は、無事道仙ゆかりの場所に移設できたのであるが、この門柱を大山町で発見した5月12日は、道仙の没後100年(7月10日が命日)に当たり、この発見も道仙に「いつまでこんな所に放っておくのか」と怒られ、導かれたようで、不思議な因縁を感じた。

今後も所在不明の「義氣貫天中」の門柱の調査や祝捷山や琴石の清掃、さらには案内板等を整備、道仙翁や祝捷山の整備に尽力された田中直三郎氏の顕彰等を会を挙げて取り組みたいと思っておりますので、会員の皆様方の一層のご理解ご協力をお願い申し上げる次第です。

最初に門柱を発見したときの面々(原田撮影)